東峰学園通信

キラリ

令和４年３月１４日
第　10　号
文責：東峰村立東峰学園
校長 梶原　秀昭

卒業おめでとうございます

春を思わせる暖かな春の光の中、令和４年３月１２日、東峰学園中学部卒業生１２名が母校を巣立ちました。

義務教育９年間を無事修了した12名の生徒は、自らの足で大地を踏みしめ、大きな一歩を踏み出します。「ふるさ　東峰村　学び舎　東峰学園」を誇りに持ち、それぞれの道を目指してほしいと願っています。

卒業生一人一人の輝かしい未来に、幸多きことを祈念していています。

式　辞

厳しい冬の寒さも緩み、この東峰の地にも少しばかりの春の息吹がようやく感じられるようになりました。

本日ここに、東峰村長　眞田秀樹様、東峰村教育長　縄田淳一様をはじめ、ご来賓や保護者の皆様のご臨席を賜わり、東峰村立東峰学園卒業証書授与式を挙行できますことに、心より厚く感謝申し上げます。

保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。義務教育の修了は、保護者としても子育ての大きな節目でもあります。今日まで、お子様の成長を心待ちにし、深い愛情で見守ってこられた皆様には、喜びもひとしおのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。

東峰学園を巣立つ十二名の皆さん。ご卒業おめでとうございます。

只今、一人一人にお渡しした卒業証書によって　義務教育九年間の全課程を修了したことになります。

東峰学園で過ごした九年間の長い間、ご家族をはじめ、先生方、地域の方々の深い愛情と温かい育みによって、今日を迎えることが出来たことに、今、改めて、感謝の気持ちを持ってもらいたいと思います。

さて、私は皆さんと二年間　共に過ごす　ご縁をいただきました。八年生、九年生と成長する皆さんの姿を様々な場面で見ることは、私にとっての楽しみであり、喜びであり、大きな学びでもありました。

皆さんとの日々を振り返ると　いろんな思い出がよみがえります。

特に、この一年間は、学園のリーダーとして「できることに全力を注ぐ」という気持ちで一年生から八年生までを明るく、そして力強く導いてくれました。

「天真爛漫　笑顔はみんなを一つに」のテーマのもと東峰学園を熱く盛り上げてくれた運動会。半日だけの開催でしたが、多くの人に元気と勇気を届けることができました。

今年初めて開催した学園文化祭、九年生、一人一人の個性が輝いていました。

そして、限られた練習時間の中であっても、共に切磋琢磨してきた友を信じ、最後まであきらめず挑んだ中体連夏季大会、一人一人が熱い思いで、仲間と共に一生懸命に取り組む姿は感動的でした。

世界中が新型コロナウイルス感染症に翻弄される中、当たり前のことが当たり前に行えない状況にあっても、皆さんは、急な変更や変化によく対応してくれました。

仲間と頭を寄せ合い、考え、学園のリーダーとして行動してきた経験は、これからの人生の大きな学びとして、皆さんを支えてくれるものと信じています。

これから皆さんは、自分で決めた進路に向かって、中学生の時とは比較にならないほど自立して自分の夢や目標に向かって歩き始めます。もう、勉強することも働くことも、基本的には自分で考え、自力で突き進むことになります。

日本を代表する国民文学作家、吉川英治氏の作品、『三国志』の中に、「百計も尽きたときに、苦悩の果てが一計を生む。」という言葉があります。これは、「あらゆる方策を試しても思い通りにないかない状況にあって、なお、あきらめず粘り強く考え抜けば、最後の最後に、最良の策がまれる。」という意味です。

人生は順風満帆な時ばかりではありません。時に波乱という言葉のごとく、自分の身を超える大波を目の前にし、苦しい状況に立たされることもあります。

そのような時は、この言葉のように、あきらめずに最善を尽くせば、きっと新たな進路を見いだせるはずです。東峰学園で学び経験したことや多くの人との出会いを糧として、自らの夢と力を信じ、自信を持って道を切り開いてほしいと思います。

ふるさと　東峰村　学び舎　東峰学園は　いつも皆さんと共にあります。

結びに、ご多忙の中、ご臨席を賜りましたご来賓の皆様、保護者の皆様に重ねて御礼を申し上げます。

今後とも本校教育に変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げ、併せて、巣立っていく十二名の卒業生の限りない前途に幸多きことを願い、式辞といたします。

令和四年三月十二日
東峰村立東峰学園　校長　梶原秀昭